

第三章 ウクライナ

ウクライナ人がロシアに於て政治的自由を獲得する手段はセバラチズムではない、フェデラリズムである

ミハイル・ドラゴマノフ

第一節 廣袤及び住民

一八九七年の調査によればウクライナ人（小ロシア人）の在住地域は左の如くである。

キエフスカヤ縣

ヴォルィンスカヤ縣

ポドリスカヤ縣

ポルタフスカヤ縣

エカテリノスラフスカヤ縣

ハリコフスカヤ縣

ヘルソンスカヤ縣

之等諸縣はウクライナ領土の核心である。尙、之等諸縣住民中三箇の主要人種を比較すれば左の如くである（一八九七年の人口、單位千人）。

縣名	總人口	ウクライナ人	大ロシヤ人	ユダヤ人
ウォルインスカヤ	二、九八九	二、〇九六	一〇五	三九五
エカテリノスラフスカヤ	二、一一三	一、四五六	三六五	九九
キエフスカヤ	三、五五九	二、八一九	二〇九	四三〇
ポドリスカヤ	三、〇一八	二、四四二	九九	三六九
ポルタフスカヤ	三、七七八	二、五八三	七三	一一〇
ハリコフスカヤ	二、四九二	二、〇〇九	四四一	一三
ヘルソンスカヤ	二、七三三	一、四六二	五七五	三二二

同一諸縣に在つて都市人口の配布は前者著しく趣を異にして左の如くなつてゐる（單位千人）。

縣名	全都市人口	ウクライナ人	大ロシヤ人	ユダヤ人
ウォルインスカヤ	二三四	四六	四四	一一九
エカテリノスラフスカヤ	二四一	六五	九八	六二
キエフスカヤ	四五九	二二九	一五二	一四二

縣名	人口	ウクライナ人	大ロシヤ人	ユダヤ人
ポドリスカヤ	二二二	七二	三三三	一〇三
ポルタフスカヤ	二七四	一五七	三〇	八〇
ハリコフスカヤ	三六七	一九九	一四五	一一
ヘルソンスカヤ	七八九	一三六	三五五	二二四

併しながら、民族的ウクライナ領域は之等の境界に限らない。ウクライナ人は尙隣接諸縣中次の諸縣に多數居住してゐる。即ち、グロドネンスカヤ縣に於てはプレストスキイ郡及びコプリンスキイ郡、チェルニゴフスカヤ縣に於てはスラジスキイ、ムグリンスキイ、スタロドウプスキイ、ノ！オズイブコフスキイ各郡以外の諸郡、クールスカヤ縣に於てはプチウリススキイ、スドジャンスキイ、グライウオロンスキイ、ノ！オオスコリススキイ各郡、ウオロネジスカヤ縣に於てはビリユチェンスキイ、ボグチャルスキイ、ワルイススキイ、オストロゴジスキイ各郡、ウオイスカ。ドンスコウ州に於てはタガンログスキイ郡、クバンスカヤ州に於てはエカテリノダルスキイ、エイスキイ、エムリユクスキイ各郡、タフリチェスカヤ縣に於てはベルデヤンスキイ、メリトポリスキイ、プリドウネプロフスキイ各郡、ベツサラブスカヤ縣に於てはホチンスキイ郡に、またロシヤ國外に於ては主としてサン河東方のガリシヤ諸郡及び匈牙利の數郡（所謂ウゴルスカヤ・ルーシ）北部ブコヴィナに居住してゐる。

ウクライナの民族的領域は約七十五萬平方料で、其中六十六萬四千平方料はロシヤ國內、約六萬平方料は東ガリシヤ、一萬五千平方料は匈牙利である。若し之れを以て一國を作るにすればロシヤに次ぐ最大國となり佛蘭西の一倍半を占めるであらう。

一八九七年の調査によれば前掲ロシア國內のウクライナ民族的領域に於て總人口二千八百萬人の中、ウクライナ人一千九百四十八萬二千人、ロシア人四百二十八萬二千人、ユダヤ人二百三萬七千人、獨逸人五十萬八千人、波蘭人四十六萬一千人であつた。東ガリシヤの總人口四百七十萬人の中ウクライナ人三百十五萬人、ウゴルスカヤ・ルーンシにはウクライナ人約五十萬人にして、現在ウクライナ全領域に於けるウクライナ人は約三千二百萬乃至三千三百萬、全世界に於けるウクライナ人は約四千萬人を算する。

第二節 ウクライナの境界

ウクライナ人と隣接民族との民族的境界線を設定することは容易でない。比較的小なる且つ綿密に研究調査されてゐる匈牙利の境界すら既に爭論を生じ、紛擾の種となつてゐる。波蘭との境界確定は一層デリケートである。波蘭とウクライナ領域分界問題は二十年の歲月を費し詳細なる研究を重ね境界及び住民に關する凡ての緻密なる調査がなされたにも拘らず、研究者間には未だ意見の一致點を見出さず、ウクライナ人は波蘭人にサン河西方を與へんとし、波蘭人は最大限の自己領内にリウフ及びドロゴブイチ市を收め僅かにブーグ河東方をウクライナ人に割讓せんとする。

ロシア——ウクライナ境界設定に至つては一層困難である。多少なりとも信じ得べき境界設定資料にては一八九七年の調査あるのみで、此調査に就いても既にロシア側とウクライナ側との間に論争を生じ、一方ウクライナ人が此の調査以前に編纂されたるプロクガウズ辭典の章を引證して調査に對し強抗なる反駁を加へれば、他方ロシアは全ウクライナの諸都市に多數大ロシア人の在住する事實を指摘し、互に譲らないといふ有様である。

第三節 ウクライナ人は民族なりや

ウクライナ民族なる存在は、ロシア人も、波蘭人も將たウクライナ人自身さへも近頃まで否定してゐたのである。尤も、ウクライナ人は方言としての自己の言語が遠からず消滅するであらうとは考へない。波蘭人も亦たワルソー及びモスクワの間に中間的言語なく、ガリシヤ方言が波蘭語の變態に過ぎないものであり、ロシアに於ける『モーツ』が毀損されたるロシア語であるといふ自己の理論は既に之れを抛棄した。併し、ロシア及びウクライナ民族關係、ウクライナ文化の獨立可能範圍に就いての問題は未だ解決し盡されてゐない。

ウクライナの研究者はウクライナ人の特色に就いて常に人類學上の調査を引證してゐるが、これはウクライナ人を特殊なものとするための説明に尤も有效である。而して、之等の調査はウクライナ人が波蘭人も、ロシア人も異なる各種の特徴を示し、身長はウクライナ人一六七〇耗、波蘭人一六五四耗、大ロシア人一六五七耗、身長に對する胸圍平均比率はウクライナ人五五・〇四％、波蘭人五五・二一％、大ロシア人五二・一八％にして、頭蓋骨其他に於ても著しき特徴を表はしてゐる。然しながら、之等人類學上の調査は學術的結論のためには大なる意義を有するかも知れぬが、民族獨立問題の實際的解決には何等の價值を有するものでない。何となれば一民族中に於

ても、都市住民は體質及び體格の上では村落住民と著しく異なつてゐるからである。又、ウクライナ人が人類學上波蘭人及び大ロシア人よりもセルビヤ人及びクロオチャヤ人に近いと云ふ事實は何等政治的結論の基礎を與へるものではない。

結局言語の問題が遙かに大なる意義を有し、決定的意義さへも有するこゝなる。言語に關するロシアの學説は不定であつて、フロリンスキイ及び其他若干の學者はウクライナ語を單に方言と見做し、學士會院は何人も獨立性を疑はざるセルビヤ語、チエック語其他の斯拉ヴ語と同様に獨立的のものとして認定した(學士會院の意見は次の如くである。即ち、『ウクライナ語はロシア語の方言に非ずして全く獨立の斯拉ヴ語である。同様にウクライナ民族もロシア民族の一派に非ずして獨立の斯拉ヴ民族である。斯拉ヴ研究家の見解によればウクライナ文學は他の斯拉ヴ文學よりも高級である』……一九〇六年二月二日附帝國學士會院の報告)。

ゼリンスキイ、コルシ、ラッポ、ダニレフスキイ、オリデンブルグ、フミンツィン、フォルトナトフ、シヤフマトフ各學士會院會員の組織する同會附屬委員會の發表したる所は次の如くである。即ち(歴史的條件は南西部ロシア(小ロシア即ちウクライナ)と大ロシア人の在住地方を完全に分離することを助成した。之れがため兩民族(大ロシア及び小ロシア)の言語に差違が生じた。之等民族の歴史的な生活は彼等のために共通の通用語を作るこゝなく、却つて方言的特徴を倍加した。現大ロシア語はモスクワ、リヤザン、ヤロスラフ、アルハンゲリスク、ノヴゴロドの民族に依つて使用されつゝあるも、之れをポルトワ、キエフ、リウオフの民族が使用してゐる小ロシア語に對立

せしめて一般ロシア語とは稱し難い)。併し、此認定もウクライナ語及び大ロシア語が極めて接近してゐると云ふ儼然たる事實を覆へすものではない。教養あるロシア人は少しく馴れ、ばウクライナ語の書籍や新聞を讀むこゝを困難とせぬ、又ウクライナ人もロシア語の書籍を直ぐ解し得る。尙ほ大ロシア並びにウクライナの農民も亦た相互の了解に差支へない。歴史上ウクライナ語がロシア語から分離した事は西斯拉ヴ語即ち波蘭語、チエック語が東部斯拉ヴ語即ちロシア語、白露語及びウクライナ語から分離した時期よりも遅いこゝは確實である。之れは『ネストルの歴史』及び『イゴリ軍記』の如き文學上の記念物が比較的遅く現はれた事に依つても判斷し得る。此の事實は兩者文化の類縁關係を語るも未だ兩者文化の單一に就ての問題を解決し得ない。従つて唯だ文化創設の意向を有する活動者の數が解決的價值を有するのみである。此の意味に於て最近五十年間に於けるウクライナ運動の歴史は充分に雄辯なる解答を與へるものである。

第四節 ウクライナの天然富源

ウクライナは天然富源に關しロシアの總ての地方と比較して最も良好なる状態にある。ウクライナはロシア石炭の四分の三(一九一一年總量二千八百萬噸)の中二千萬噸)ロシア鐵礦の三分の二以上(一九一一年總量五百三十萬噸の中三百六十萬噸)ロシア滿鐵礦の總量の四分の三、ロシア鹽の總量の三分の二を産し、尙數人の研究家の算定に依れば其輸出穀類は總量の十分の九を占めてゐる(大ロシアは生産穀類の〇・七%を、ウクライナは同二七%を輸

出する)、又ウクライナに於ける砂糖の生産額は全露の五分の四である。

然れどもウクライナ住民のために此の富源の價值如何を判断することはロシアの以前の經濟組織からウクライナを分離せしめる目的を以て研究せられた専門的調査の不充分のため極めて困難である。ロシア及びウクライナの經濟的相互關係の問題を研究したゲフテル並びにスタシユクの論文は互に相手の論旨を滅却するものである。(註)

ゲフテルはウクライナがロシアの穀倉たるのみならず肉、水銀、粘土、鐵礦、銑鐵、鋼、石炭、甜菜、砂糖等の倉であり、ロシアはウクライナ無くしては存在し得ない事を論斷して、ウクライナを祝福してゐるが、スタシユクはゲフテルの研究法を論難し、鐵道輸送狀態調査資料(之れは研究上唯一の正確な方法であることは疑ひない)に依つて全然他の結論を與へてゐる。即ちウクライナは原料品の倉庫ではなく、波蘭及び大ロシアの製造工業のための市場であるに論じ、自己の經濟的獨立に對するウクライナ人の誇張的樂觀主義やウクライナ經濟狀態に就ての事實以上の高い評價はウクライナ民族運動にまつて危険であるに力説してゐる。何れにしてもロシアにウクライナに對する經濟的相互關係の著大である事實は疑を挟む餘地がない。而して、此の關係を如何に解くべきか云ふ問題は全く研究されてゐない。

註 ゲフテルの論文「ロシア經濟生活に於けるウクライナの價值」(一九〇九年「文學研究雜誌」第九編所載)。スタシユクの論文「大ロシア及び波蘭に對するウクライナの經濟的關係」(一九二一年「キエフに於けるウクライナ學術協會の報告」の第七、第九編所載)。

尚、カ・オベルテフの論文「大ロシア及び波蘭に對するウクライナの經濟關係に就ての問題」(一九二二年發行「ウクライナ生活」の第三號所載)參照。

第五節 ウクライナの歴史的運命

北部及び南部スラヴ種族の歴史的運命は韃靼侵入の時から分離した。北部種族は最初ノヴゴロド公國を、次にモスクワ公國を建てたが、南部種族はキエフの没落時代より政治的獨立を失ひ、歴史的舞臺から消滅した。即ち、ウクライナ人の歴史はリトワ、ポーランド、ロシアの歴史に於ける一部分になつた。然し南部ロシア種族は常に自己の獨立のために戦つた。此事はウクライナ住民に獨特の消滅し難い痕跡、即ち、抗争のために必要な果斷、勇敢の精神を與へた。モスクワ方面からの粗暴無賴の『盜賊的』分子の侵入はウクライナ民族の之等特性を益々強大にした。

結局、數十年間繼續したポーランドとの戦争時代が現はれ、特別な政治的軍事的才能を有するフメリニツキの指導によつてウクライナはポーランドから獨立をなしたが、其獨立保持の力なきを感知してモスクワ皇帝の支配下に立つこゝになつた。一六五四年ペレヤスラウリ條約(ウクライナがモスクワに併合された條約)の意義に就て二つの見解がある。ウクライナの研究者並びに若干のロシア學者(ベ・ノリデの如き)はロシア及びウクライナの關係は相互の意思より成立したもので聯盟の形であつたに云ひ、ロシア研究家の大部分はウクライナは無條件にモスクワに併合されたのである。唯だモスクワ皇帝の獨斷的意志を以て廣大な内政自治(行政、軍隊、財政、司法)並びに自主的外交の若干の權利が與へられたものであると解した。ウクライナ併合に關する解釋上の争はフメリニツキの

死後直ちに實際上に現はれ、モスクワ政府はウクライナの各都市に自己の軍隊及び自己の長官を派遣してウクライナの長官達の憤怒を買った。ウクライナの長官達は確乎たる政治的意見を有せず、又其後に於けるコサックの首領も一の政策から他の政策に向つて轉々してゐる状態であつた。即ち、コサック首領ウイゴフスキイは再びポーランドに條約を締結してモスクワに執拗な闘争を行ひ、彼の繼承者（フメリニツキイの息ユーリ）はウクライナをモスクワ政權へ復歸せしめ、首領ドロシエンコは土耳其首長に援助を求め、結局、ウクライナは二部分、即ちモスクワ領及びポーランド領に分割され、兩者各自特別の組織を有するものになつた。併し、此組織はポーランドやモスクワに闘争をなし得る充分の力を有するものでなかつた。即ち、ウクライナの孰れの部分に於ても強力な機關の組織されたものなく、上層民は下層民に敵對してゐた。モスクワは此の情況を巧に利用し、上層民に對しては下層民を教唆して以て上層民の自治的方針を闘ひ、同時にまた下層民の憤激及び暴動は武力によつて之れを鎮壓し、上層民の同情を得た。

ピョートル時代前、モスクワは既にコサック首領の選舉を監督し、軍隊長官の選舉を自己の掌中に收め、モスクワの軍隊指揮官及び守備隊をウクライナの要地に駐在せしめ、ウクライナ政權者に對しては自主的外交を禁止し、ウクライナの教會は之れをモスクワ總主教に隸屬せしめた。併しながら、ウクライナの内政、即ち財政、軍隊、選舉施行、官吏の任命は地方自治團體に行はしめた。カール十二世の没落後ピョートルは急轉直下の勢を以てウクライナのセバラチズム及び政治的獨立思想を闘争し、ウクライナ地方はロシア官吏が實際に統治する「こま」なり、スコ

ロバドスキイの死後（死去は一七二二年）コサック首領の選舉は施行されざるに至つた。然るにピョートルの死後コサック首領の權能は復活した。而して、キリル・ラズウモフスキイのコサック首領時代にはウクライナは隆盛期とも云ふべき觀を呈した。併しながら、エカテリナ二世はラズウモフスキイを退かしめ、徹底的に首領制度を破壊し、一七七五年自由コサック團の最後の殘物であるザボロジスカヤ・セーチを解散し、ウクライナに總督府を設置した。最初のポーランド分割によりウクライナがロシアに併合せられるに及んで、左岸ウクライナは一般法規に依つて治めらるゝ、ロシア諸縣に外ならぬものになつた。ウクライナは陰謀的イエズイット貴族の羈絆から獨裁的官僚の羈絆に陥つた。併しながら、ウクライナの上流社會は此の變革を敢て不平もなく承認した。これは上流社會がウクライナの政治的自由の喪失をウクライナ農民に對する農奴法施行によつて償はれたからであつた（一七八三年）。

ウクライナの政治的面目の失墜に伴つて民族的特性が破滅を來した。既に一七二〇年に於てピョートル大帝は大ロシア語印刷の教會用書籍を除くの外、ウクライナの領域内に於て他の書籍を出版することを禁じ、大僧正作の讚美歌をウクライナで印刷せんとするキエフ修道院長の企圖をも許さず、之れを大ロシア語で印刷すべきことを要求した。一七六九年キエフの大修道院は住民がロシア語の讀本を購買しないため、ウクライナ語でそれを印刷することを宗教會議に懇請したが、其懇情も拒絕された。

第六節 ウクライナの民族的復興

第一項 ハリコフ時代

ウクライナに於ける農奴法の制定はウクライナ人を上下の二階級に截然區別した。以前波蘭語を使用した上流階級はロシア語に移り（エム・グルシエフスキイは之を『自己の民族よりの二重の迷』と稱してゐる）、ウクライナ語は平民のみの用語となつたが、多くの知識階級は村落の家庭に於て、ウクライナ人の雰圍氣中に在つて初等教育を受けたため、ウクライナ語を他國語と見做すことも出來ず、之を自國語と思惟せざるを得なかつたのは言ふまでもない。従つてウクライナ文學は全然死滅することはなかつたけれども、多くの場合ユーモアの内容を持つ文章として普及し、斯くしてウクライナ文學の新時代を開拓した。コトウリヤレフスキイ著『エネイダ』も此の種の創作に屬し、該創作は直ちに多大の贊詞を得て、ウクライナの知識階級には勿論、ロシア知識階級中にも擴まつた。『エネイダ』の外、コトウリヤレフスキイ著『モスカリ・チャロウニク』及び『ナタルカ・ポルタフカ』は今に至るもウクライナ劇場のクラシツクの演劇目録から消え失せないものとなつてゐる。

教育の普及、西歐思想の浸漸、ウクライナに於ける文化新中心の創立（例へばハリコフ大學）等はウクライナ思想の復興に都合のよい勢を作つた。デモクラシーの傾向は民族に留意すること、民族を研究すること、従つて其民族と當該民族の語を以て談ずること餘儀なくせしめた。西方から來つた新政治思想は自治主義及び國家の新形式

に就ての考察を衝動した。此の氣分はハリコフ大學のウクライナ知識階級（グリヤーク・アルテモフスキイ、クウイトカ、オスノウイヤネンコ、メトリニスキイ等）から流れ出た。該知識階級はウクライナ語を使用して多くの著作を發表し、又ロシア語を以てウクライナ問題を論じた。當時ボレーチカ著『ロシアの歴史』は大なる影響を與へたものであるが、其内容は極端な反モスクワ的精神を發揮したものであつて、これは、印刷によらず、手記によつて普及された。此時代には言論のみならず、ウクライナ政治的結社の跡をも留めて居る。併し、民族的自覺は極めて微々たるもので、ウクライナ語文法書の最初の著者パウロフスキイ（一八一八年）が其の緒言に於て『小ロシア語はロシア語の壓迫により遠からず滅亡するであらうが故に小ロシア語の聲音を永久に遺さねばならぬ』と述べてゐることに依つても之れを證する事が出来る。

第二項

一八四〇年代。シエフチェンコ。『キリルロ・メフオヂエフスコエ團體』

一八四〇年代の中葉ウクライナ思想の中心はペテルブルグに移り、次でキエフに轉じた。ゴーゴリの創作の影響を受けてペテルブルグに於けるウクライナ人の知識階級中に故國民族並びに故國地方に對する興味が起り、彼等はウクライナ語の書籍を出版するに至つた。特にペテルブルグに於けるタラス・シエフチェンコの創作はウクライナ文學の爲に萬丈の氣焔を吐いた。農奴であり、次で政治的追放者であるシエフチェンコは極めて困難なる生活條件の下に自己の著作を以て（第一回の叢書『コプザリ』は一八四〇年出版）ウクライナ文學自立の基礎を固めた。ウクライナ知識階級に狂喜的に歡迎されたシエフチェンコはロシア評論家からは最も冷酷な批判を受けた。ベーリンスキイ

さへも彼を、非文化的無作法者であり、知的眼界の狹隘者であるを批判して敵對の態度を取つた。

一八四〇年代の末期からウクライナの社會生活の中心はキエフに移り、コストマロフ、クリーシの如きウクライナ思想の代表者が活動した。殊にウクライナ文字法を制定したクリーシの功績は特筆大書すべきである。抑々ウクライナ愛國主義者たるクリーシは先づロシア官吏としてホルム問題に關する反波蘭ロシア化運動に其主義を結合せしめ、後にガリツィヤに於てポーランド—ルウテニア協調の味方となり、晩年に土耳其に對し非常な同情を向けた。キエフに於てクリーシはコストマロフ及び其他のウクライナ知識階級代表者と共に政治結社『キリルロ・メフオヂエフスコエ團體』を組織してウクライナの獨立を計畫した。當時のウクライナ知識階級は悉く此團體に入黨した。團體の綱領は、自由と平等、農奴法及び階級的差別の撤廢、民族の教育等であつた。而して各スラヴ民族は各共和國を建設し、唯だ外交事務を全スラヴ共和國の代表者を以て組織すべき『總スラヴァン會議』が統一するを云ふ計畫であつた。

團體は最初ロシアを支配者並びに指導者とすることを主義としてゐたが、モスクワに對する關係は其後次第に疎遠になつて來た。最初から團體に最も密接な關係を持つたシユフチェンコは其創作に一定の強固な反莫斯科調子を加味し、此種の調子は時の経過に伴ひ益々強くなつた。然し、團體は純思想的團體であつて、其團員は親密な集合として集まり、ウクライナの著作殊にシユフチェンコの創作を読み、何等具體的政治的計畫を有しないものであつた。團體は永續しなかつた。一八四七年偶々二名の團員の會話を聽取した學生の告發に依つて、團員は捕縛され、又流

刑に遭ひ、殊にシユフチェンコは迫害を受けてオレンブルグ地方に流刑の身となつた。團體の創立委員及び發起人であるクリーシやコストマロフはペテルブルグに於て自己の事業を繼續し、雜誌『オスノフ』の出版さへも爲し得た

第三項 一八五〇年乃至七〇年代 『グロマーダ』の活動。

マイルコ・ウオウチョーク(マリーヤ・マルコウイチ)は其創作に於てウクライナの農奴状態を鮮明に描いた。ウクライナに於ける農奴解放の社會的準備時代は此女性の作に現はれてゐる。ツルゲネフは此女流作家に痛く感動し、彼女の作は其感動力に於てピーチエル・ストウに比すべきものと云つてゐる。其後ネチューイ・レウイツキイ及びバナス・ミールヌイの作が現はれた。

ウクライナ運動の政論的及び學術的方面は従前の如く雜誌『オスノフ』を發行したコストマロフ及びクリーシに依つて發展を見た。ウクライナの過去に就ての批判的研究はクリーシの事業中の顯著なるものである。ポーランドに於ける自己の活動時代にポーランド學者の影響の下に在つた彼は、多くの文獻を比較研究し、コサックの兇猛並びに残忍を描寫し、自著に於てコサック團及びコサック首領を理想化するウクライナの學者や評論家の傳統的潤飾に對し論争を試みた。

『キリルロ・メフオヂエフスコエ團體』の悲惨な最後は、ウクライナ組織化の進行を停止せしめなかつた。一八六〇年代の初期に『グロマーダ』と稱する團體が創立された。最初のウクライナ『グロマーダ』は純文化的任務を有する學生團體としてキエフに於て組織され、次に他の大學存在都市に組織された。農奴の解放はウクライナ知識階級

をして新社會問題を研究せしめ、民族の教化並びに物質的生活狀態の向上に對し力強い活動の必要を自覺せしめた。『グロマーダ』團體員は大學卒業後も相互に連絡を失はず、且つ自己の團體へ新會員を入會せしめて其盛大を計つた。同時に青年團體と並び之れと異なつた『スターラ・グロマーダ』と稱する壯年者團體も組織された。又キエフ『グロマーダ』と並んでオデッサ『グロマーダ』及びハリコフ『グロマーダ』等々が組織された。一の『グロマーダ』は他の『グロマーダ』とよく連絡を取るに努めた。之等地方グロマーダ會員は其在在に於て知識階級を見出す時には之を糾合して新グロマーダを創設した。此組織化觀念は他の大學都市にも波及し、ウクライナ以外の大學都市にさへも傳はつた。普及と、内部連絡の比較的強固なるを、相互關係の制定により、グロマーダは侮る可からざる社會的勢力となつた。要するに南部ロシア知識階級の最優良分子は全部之等『グロマーダ』の中に糾合されたのである。

數の増加に伴ひグロマーダの思想的内容は深さに於ても深まつて行つた、即ち『グロマーダ』は以前はシエフチニコ崇拜者と合流した學生の友誼的團體だったが、其後に於けるロシア社會思想の發達はウクライナ『グロマーダ』にも反映し、該グロマーダは漸次明白な社會的並びに政治的急進主義の性質を帯びて來た。

ウクライナ思想はグロマーダ以外に、一八七〇年代初期に他の組織的中心を作つた。『ロシア地理學會南西支部』は其の主要なもの、一つで、該支部はドラゴマノフを首領とし、『キエフスタラヤ・グロマーダ』の全會員を網羅した。

第四項　ロシアに於けるウクライナ運動の迫害

ロシアに於けるウクライナ愛國主義的運動は一般ロシア知識階級中に於ける思想の發現であつて、ウクライナ運動者は總て自己を先づロシア知識階級と考へ、ウクライナ語に對してすらも單に之を家庭用語に有利な民族語と見做し、學術的用語並びに文化向上の要具はロシア語であるを考へた。彼等の政治運動は反ロシア的のものでなくロシア國家の一般的改造計畫の範圍内に於て發展しつゝあつた。それにも拘らず、ウクライナ黨は政府側から益々疑惑の眼を向けられ、一八六三年内務大臣ワルエフはウクライナ語の通俗的、學術的及び教科的書籍の出版を禁止した。『特別なウクライナ語は未だ曾て無かつたものであり、又現在も無いのである、且つ存在することも出来ぬ』といふのが其理由であつた。また同年の宗教會議は福音書の譯本のみならず、宗教に關する一切の書籍をウクライナ語で印刷することを禁止した。而して、ウクライナからはコニススキイ、チビンスキイ、エフィナンコ等の活動家が追放された。

ロシア政權者をして此の如き態度を取らしめたものは次の二つの事情である。即ち、ロシアに於けるデモクラシーの問題が純理論であつた間は、ウクライナミロシヤとの對立は猶能く調和されてゐたが、當時に至つては既にガリシヤに於けるルテナヤ——ポーランド關係の例に徴して、デモクラシー及び自治の主張が實生活に現はれ始め、狀況の如何に變ずべきかは察し得るのであつた。ガリシヤに於けるウクライナ運動の實際と其發達は一般にロシアの理論と相反するもの顯著なるものがあつた。之れが事情の一つである。次に、ウクライナ教化事業は、ウクライ

ナ民族の下層社會、即ち、ウクライナ農民に對して行はれねばならぬ、従つて、ウクライナ愛國主義がウクライナ運動に轉ずる場合に於ては、其運動は必ずや鮮明な大衆的、即ち、民族的デモクラシーならねばならぬ。之れが事情の他の一つであつた。

此事は政府の疑惑を招き遂に斷乎たる手段の實施になつた。一八七六年五月十八日附の告示に依つて外國から小ロシアへの書籍冊子の輸入、ロシアに於ける之等の出版(歴史並びに文學出版物以外)、小ロシア語を使用する演劇演説、講義、歌唱が禁止され、此禁止は殆ど五十年間繼續した。只、演劇の禁止のみは一八八一年一旦解除されたが、二年後再びキエフ總督府管下諸縣のために實施され、ウクライナ演劇はウクライナ以外の地にあらざれば上演し得ざることとなつた。斯くしてロシアに於けるウクライナ運動は致命的打撃を受け、殆ど挽回すべからざる難境に陥つた。ウクライナ社會生活のうち、半世紀間は殆んど暗黒時代になつた。

第五項 ウクライナ人の亡命。ミハイル・ドラゴマノフ

一八七六年の法令に依つてウクライナ運動の實行はロシアに於て不可能になつたが、其運動は全然萎縮せざるに非ずして、ウクライナ以外の地に轉じ、暫くしてガリシヤに新地盤を開拓するに至つた。

ウクライナの亡命者中最大の運動者はミハイル・ドラゴマノフであつた。彼の社會運動は全般に亘り、特にウクライナ——ロシア問題に心血を注ぎたるを以て、極めて深い注意を植するものなるに拘らず、彼を知るロシア人は甚だ少ない。

ドラゴマノフはコサツクの小地主の家に生れ、ロシア及びウクライナ兩民族の社會歴史に大なる足跡を印したロシア兼ウクライナ知識階級に屬する人間であつた。彼の學界に於ける進路は、其反政府的出版物の爲に危険人物と認められて、罷免を受けたるに依つて塞がれた。一八七五年からドラゴマノフは亡命生活に入り、最初ジエネバに後ソフィヤに於て活動し、以てロシア及びウクライナの社會思想に影響を與へた。

ロシアの政治的思想の地盤に在つてはドラゴマノフは比較的穩健な態度を持し、一般の社會問題に對しては注意する所左程深くなかつたが、個人の自由に關する問題は之れを第一に絶叫し、個人と國家との關係の更改の必要(國家の權限を收縮し、個人の權利を擴張すること)に就て極論した。ドラゴマノフは歐羅巴立憲主義の原理をロシア人に意識せしめる爲に活動した最初の人々の中の一人であつた。彼の主なる功績はロシアの中央集權主義に對する批判並びに聯邦主義の原理に基づくロシアの改造の主張であつた。彼は左翼ロシア政黨と際立つて色彩を異にしてゐた。

ウクライナ人であり民主主義者である彼は、青年時代から、ウクライナに於ける民族事業は自國のウクライナ語なくしては不可能であるを確信してゐた。最初彼は、ウクライナ語は日常用語のための補助語であり、文化事業の言語としてはロシア語に限るを考へたが、後に至つて此説を放棄し、ウクライナ文化の各方面に於ける完全な發達の必要を力説し『日常用語のための補助語』なる論に對しては斷乎として反對した。又ウクライナ語研究の範を自ら示し、遂にウクライナ學に於て何人も拮抗し得ざる權威になつた。

併し、自國語に對する愛著も、獨立的ウクライナ文學の創造に對する信念も、決して彼を狹隘な偏見者或は民族的排外者流に爲さなかつた。彼は、ウクライナ運動は民族的自我論でなく、全人類の理想を以て指導されねばならぬを考へ、社會事業の行動並びに其細目の上に此理想を反映せしめた。彼がガリツィヤに於て活動するや、先づ保守的傾向に注意を向け、其結果として、ロシアのデモクラシーがガリツィヤをウクライナ化するために最も良好なる手段であることを確信し、先づロシア書籍の普及並びにロシア圖書館の設立を計り以て時弊の矯正に努めた。『モスクワの斯拉ヴ心酔者』雖も余の如き『ウクライナ單一主義者』程に『モスクワ』(ロシア)の書籍をオーストリアに於て普及せしめなかつたことを余は斷言するに憚らない』と彼は自己に就て述べてゐる。

斯くの如き精神はウクライナに關する彼の政治的要求に於ても一貫してゐた。彼はウクライナの文化的民族自決の達成を極力主張しながら、行政的民族領域の區分を必要とせず、モスクワ統治の中央集權主義を破壊し、ロシアを各州自治制に改造することが第一に着手すべきことであり、従つてウクライナも數個の自治州に更改されるべきであるを考へた。

之れがため、中央集權主義の臭味を帯び、ロシアに於ける地方の生活問題に對して冷淡である純ロシア政治家流と離れたドラゴマノフは、他方に於ては、一領域的民族自治州としてウクライナを獨立せしめることを必要とするウクライナ民族主義の青年團とも離れた。従つて亡命生活の最後期に於て彼は精神上極めて苦痛の多い不安な生活と試練を受けた。第一、彼に對する批判は區々であつたが、ロシア左翼派は彼を民族主義者として非難し、ロシア官憲は彼を以て『分離主義者』となすの外なしと云ひ、ポーランド派は彼をモスクワ派遣員(ガリシヤに於ける)にあらずして何ぞやと苛察し、ウクライナ土着人は親露主義者として彼を罪した。

第六項　ガリシヤに於けるウクライナ運動

既にクリーシの活動に於て見る如く、ウクライナ民族運動は國境を越えた。ガリシヤのルテニア人(ロシアのウクライナ心酔者)は接近して一の河床に合流すべき趨勢を現はした。一八四〇年代以前に於てはウクライナ運動はガリシヤに全然なかつた。即ち、ウクライナ語或はルテニア語は公然波蘭の方言と見做され、政府任命の學制改革委員會は一八一六年ウクライナ語を教授すべきや否やの問題を協議した結果、ウクライナ語はポーランド語の變形であり、教育ある人物を養成すべき學校に於て採用すべきにあらずと決議した。ガリシヤに於ける書籍が民族語でなく、民族語と教會用斯拉ヴ語とを混合して印刷された事もウクライナ語を廢物たらしめた一原因であつたが、其時、ロシアに於てはコトリヤレフスキイ著『エネイダ』が普及され、多くの作家は現用民族語を使用してゐたのである。

漸く一八四〇年代にガリシヤに於ける運動が相當に發展し、ルテニア人中シャシケーウイチの如きは民族復活運動の第一人者として、ガリシヤに於て目醒ましい役割を演じた。シャシケーウイチはウクライナ愛國主義の保持者が農民であることを認め、農民を相手として行動を開始した。一八三四年シャシケーウイチは數人の同志と共に文學叢書『ゾーリヤ』を編輯した。此叢書は檢閱官から修正を加へられて發行されるに至つた。一八三七年發行のシ

ヤシケイウイチの作『ルサルルカ・ドニストロワヤ』は『エネイダ』と同一の意義を有するものであつた。

ウクライナ復活事業はオーストリアに於ける政治的事件の發生に依つて支援を受けた。即ち、波蘭に對する闘争のため『ガリシヤ』に於て支援を求めつゝあつたオーストリア政府の發起に依り『ゴロウナ・ラーダ・ルースカ』(コサック人集會)が一八四八年創設された。オーストリア政府の意圖としては此集會は反波蘭闘争の武器として利用せらるべきものであつた。此集會は主としてルテニア語の平等を計り、『ウーゴルスカヤ・ルーシ』を含むガリシヤの分立に努力した。當時オーストリアはポーランド人の獨立運動を恐れてゐたので、此の東ガリシヤ分立の企圖は其事情を考慮して起されたものであつた。尙、該團體は機關紙『ゾーリヤ・ガリツカヤ』をリウヰフに於て發行し、同地にウクライナ公會堂を設立して之れに圖書館、印刷所、博物館、劇場等を附屬せしめ、以て同地をしてウクライナ運動の中心たらしめた。當時リウヰフ大學に於てはウクライナ語の教育が開始され、出版界は活氣を呈し、ウクライナ作家が簇出し、新聞が發行された。然るに其後結ばれたポーランド—オーストリアの協定は根本的に此情況を變じて、オーストリア政府はウクライナ人の保護を中止し、一八五一年集會を解散した。政府の保護を失つたルテニア社會運動者は微力となり、オーストリア議會に於て最も多數を有するルテニア黨すらも政治的闘争を試みるこゝなく、政府に對しての請願に依り自己の目的を達する方針を取つたので、何等見るべき役割を演じなかつた。

政治的舞臺に於ける事業の失敗に伴ひ、ガリシヤ人中には新運動が芽生えて來た。以前から彼等の視線は、一再ならず東方、即ち、ロシアに向つて注がれた。ロシア帝國の光輝、ハンガリヤ鎮壓のためガリシヤを通過したロシア軍隊の威容、ロシア運動者(ミハイル・ボゴデイン等)の影響——凡て之等は對モスクワ親善運動の根幹を作つた。此政治運動が公然起つたのは一八六六年であつて、同年ウクライナ雜誌『スローウオ』はルテニア人ミロシヤ人は同一民族であり、ウクライナ人及び大ロシア人間には何等の差違なく、全『ルーシ』は單一の文學語たるロシア語を使用すべきであるを論じた。次で、ヴ・ドゼドジツキイは『小ロシア人が一時間で大ロシア語を修得する文法』を題する小冊子を著した。斯くして反ポーランド、反オーストリア、反ウクライナ化を方針とする對モスクワ親善運動が起つた。

然るに恰も此時ガリシヤのウクライナ運動はロシアに於て壓迫を受けたウクライナ運動者から大なる支援を得た而して、ガリシヤはウクライナ兩部のウクライナ思想のための中心となり、避難所となり、漸く民族事業は發展してウクライナ運動者の數も増加し、リウヰフに於てはレウイツキイ(ネチウイ)ルドチエンコ(パナス・ミールヌイ)クロピフニツキイ、スタリーツキイ等が自己の意見を發表し、地方の第一階級は彼等と共同して事に當つた。雜誌『ゾーリヤ』は益々發展し、在ジエネバのドラゴマノフに指導される『プラウダ』も大なる政治的影響を與ふるに至つた。

ガリシヤに於けるウクライナ運動は外國から新しい力を得て地方の新問題に處するこゝとなつた。

一八四八年からガリシヤに『ナロドニキ』派が擡頭した。併し、此派は理義明晰なプログラムも、確固たる機關

も具備したものでなく、其政治的活動は議員の選出に限られてゐたが、ドラゴマノフ的社會思想の直接的影響を受けるに至つて、此無定形の黨派から初めてウクライナのラヂカル黨が一八七八年に組織され、社會主義的土地利用をプログラムした。

議會に於てはウクライナ選出議員の一部が波蘭人との協調或は波蘭——ウクライナ兩善策を行ひたるを以てウクライナ人間に政見の相違が生じた。バルウインスキを黨首とするガリツィヤ『ナロドニキ』派議員は多くの文化的經濟的讓歩並びに反モスクワ派選舉の應援を交換條件として社會急進主義の拒否、波蘭人保守的政策の支持、オーストリア及びポーランドに對するルテニア人の誠忠を波蘭と約した。此協定はガリツィヤに於けるウクライナ社會の總ての流派に極端な混亂と不和を醸成せしめ、ローマンチウクを首領とする『ナロドニキ』派の一部は急進主義に、一部は對モスクワ親善主義に傾き、對モスクワ親善主義者も亦た二派に分れ、急進派も急進民主主義のドラゴマノフ派と社會主義とに分裂した。グルシニフスキは此の混亂時代に於て一定の計畫を有した唯一の人で、彼は一九〇四年キエフからガリツィヤに移り、リウフに於て芽生えたシエフチェンコ團體に先づ注意を向け、之れを全ウクライナ運動の精神生活の中心たらしめた。次で、彼は雜誌『リテラトゥールノ・ナウコーウイ・ウイストニク』を刊行した。一九〇七年レイフスラートに於ける選舉の際ウクライナ運動者の分裂離散後、彼はローマンチウク派並びに右翼急進派に依つて組織された『民族民主黨』に於て積極的行動に出たが、其プログラムは民族的プログラム（奥匈に於けるウクライナ領土を各自の議會を有する自治州として分立せしめること）及び民主急進的プログラム（普通選舉權の附與、農民のため地主所有地の買収）であつた、此黨は多數の知識階級を糾合し、農民階級中に地盤を固め組織強固實力に充ちたるを以て、二十世紀の初葉から開始された東ガリツィヤ問題に關する波蘭人ミウクライナ人の激烈なる鬭争場裡に於て波蘭民族デモクラシーの強敵として立つた。併しグルシニフスキは、學術的事業のため政治的活動に充分な時間を割與し得ず、又地方的ガリツィヤ事件に深入りするを好まざりしたため黨派に長く留まらなかつた。

第七項　ロシアに於けるウクライナ運動の復活。一九〇五年。

ロシアに於けるウクライナ運動は政府の壓迫を受けたるに拘らず、只一時屏息状態に在つたのみで、實際に於て終止したものでなかつた。以前のグロマード團の幹部は各地に残存し、團員の個人的連繋は維持されてゐた。一九〇年代からウクライナ語に對する壓迫が緩和されたため、ペテルブルグに於てウクライナ語の書籍の發行を見るやうになつた。

之れに伴つて、結社の事業も活氣を帯び來り、既に一九〇〇年代に於てペテルブルグに『ウクライナ・ソシアリスト・フェデラリスト』が組織された。該團體はドラゴマノフ派と異なり、州自治でなく民族的領土自治を主張した。一九〇〇年代の初期にはキエフに於て『タラソ・クルジョーク』が組織された。これは文化教育運動を使命とするものであつた。一九〇七年には既にウクライナ各地方の『グロマード』を結合した『グロマード』聯盟が成立し、『ラーダ』（議會）と稱するキエフ中央グロマードは各地方『グロマード』が選出することになつた。一九

〇〇年ウクライナ最初の政黨『ウクラインスカヤ・レオリユツイオンナヤ・パールチャ』(ウクライナ革命黨)が組織された。而して他の凡てのウクライナ政黨の幹部は凡て此黨の出身者であつた。此黨は學生グロマーダの青年等によつて創立された。此黨は中央委員會をキエフに置いてゐたけれども、主要事業はリウオフに於ける在外委員會が處理してゐた。一九〇四年の末に黨は分裂の端を啓き、穩健派は黨を脱して『トワールリツウオ、ウクラインスキフ、ポスト・ポフツィフ』を作り、後に『ソシアリスト・フェデリリスト』(異稱『エス・エフ』)を稱する勢力ある政黨に轉化した。此黨の根本的要求はロシア民族の聯盟及びロシア國家の一部としてのウクライナの民族的領土自治であつた。革命黨の左翼派はウクライナ社會民主黨を作つたが、該黨は間もなく自治團體としてロシア社會民主黨と結合した。

ウクライナの生活は全ロシア解放運動の開始と共に俄かに活氣を呈した。一九〇五年ウクライナ語禁止の解除によつて一時に數多の雜誌が發行された。國會の選舉に際してウクライナ人は最も緊張した活動をなし、立憲民主黨(カデット)を提携して議員四名を選出した。之等議員の發起に依り國會に於てウクライナ俱樂部(ウクラインスキイ・クループ)が設立され、此俱樂部には更に約四十名の議員(エム・コワレフスキイ、シユテイングリ男爵、スウエーチン等)が入會した。第二國會に於ては『ウクラインスカヤ・グロマーダ』團が組織された。此團體は最初労働黨に入黨したが、後に實際運動の技術的方面並びに主義上の考慮により労働黨を脱黨した。グロマーダ所屬の議員は四十七名を算し、特に青年が多かつた。地方に於ては之れと共に『プロスウィータ』を稱する團體及び『クルー

プイ』を稱する團體が起り、ウクライナに於ても亦ロシアに於ても極めて速かに其團員は増加した。ウクライナ人はガリシヤに於ける『シエフチニコ』團體と同様の學術研究團體をキエフに置いた。此團體はやがてウクライナ人の學術思想の中心となつた。

其後保守的運動の勃興に伴つてウクライナの諸運動は政府側の壓迫を受けた(『プロスウィータ』團體の解散、シエフチニコ百年祭舉行の禁止)。然しウクライナ民族運動は此時既に抜く可からざる基礎を固めてゐた。出版界の活動状態を観察するに、一九〇七年出版物の種類百以上に達し、其後は毎年二百乃至二百五十種を算し、其發行高は五十萬部以上に達した。概して、ウクライナ出版業はロシア、ポーランド、ユダヤ、エストニア、ラトウィヤ等に於てのそれよりも小規模であつたが、一舉にしてアルメニヤ、リトワ、グルジヤを凌駕するに至つた。それに伴つてウクライナ文學は、一躍ロシア及びポーランドに次いでスラヴ文學中の第三位を占むるに至り、ウクライナ語は通俗語並びに文學語の範圍を脱して、學術的用語となり得た程に進歩した。

之れがためロシア國家主義派に不安を來し、ストルルーエは斷然ウクライナ運動に對して社會鬭争を宣戰した。然し此宣戰は尙ほ政治的行爲として實現するの地盤を持つに至らなかつた。抑々ロシアに於けるウクライナ運動は特別の事情のためガリシヤ運動と著しく趣を異にし、ウクライナ——ロシア問題はポーランド——ウクライナの葛藤とは全然同日の論でなかつたのである。之れに關しては局外者にして周到な觀察を施して證明したものがあつた。其所説は左の如くである。

『ウクライナの知識階級は全くロシア式である。彼等はロシアの學校に於てロシア文學の教育を受けた。官吏、辯護士、教師、醫師、學者等の社會生活に於ては常にロシア語が使用されて居る。彼等はウクライナ語で書く時に於ても、屢、ロシア語で考へ、ウクライナ文にはロシア文を引用して説明を加へてゐる箇所が多い。』『デイロ』が述べた如く、ロシア人ミウクライナ人が同族である云ふ自覺はロシア的ウクライナ人の自覺の構成分子となつてゐる。ロシアに於けるウクライナ運動が文化事業に於て極めて特色の見るべきものあるを示したに拘らず、政治方面に於て何等見るべきものなしに終つた云ふ事實は、ウクライナ人が自己をロシア國家に屬するものミ考へて居る心理作用の結果に出たものである。ロシアに於けるウクライナ運動がガリシヤに於けるそれミ反して、一九〇六年に行はれた微弱な自治運動後に於て、或力ミして存在しない云ふ狀況は、之れ亦た前記心理状態の然らしめる所である』(I. Wasilewski 著 Ukraina i prawo ukraiina 194頁所載)

第七節 戦争と革命

ガリシヤに於けるウクライナ人ミ波蘭人ミの激烈な闘争並びにロシアに於けるウクライナ人の文化的事業は戦争の開始に依つて中斷された。ロシアに於てはウクライナ文の印刷は再び禁止され、ウクライナ結社は監視下に置かれ、シフチェンコ誕生百年祭舉行は中止となつた。リウオフがロシア軍隊に占領された後、ウクライナ運動の監視はガリシヤにも行はれた。ウクライナ人がロシア政府に對して懷抱する反感を知る敵國はウクライナの『ソユーズ』革命の勃發と共にロシアにはウクライナ運動が激烈な勢を以て起つた。

四月上旬キエフに於て全ウクライナ民族會議が開かれ、ウクライナ各地方代表者一千名餘並びに多少名を知られたウクライナ社會運動者全部が之れに参加した。エス・ペトリューラが此會議の議長として選ばれた。而して、此會議は次のやうな決議をした。

- 一、ウクライナの民族的領土自治
- 二、聯邦組織としてのロシアの改造
- 三、共和制度の制定
- 四、民族的少數者の權利保障

之等の要求は全露憲法會議の事業の主要事項たるべきものであつた。セバラチーストは全く消失した。ウクライナ人が『ウクライナ人のためのウクライナ』ミ云ふ標語を以て指導されるこの非難は事實無根の虚偽である。何ミなれば、斯くの如き標語は自覺あるウクライナ運動者の賛成を得るものでないからである。ミグルシエフスキイは方説した。會議は『ツェントラリナヤ・ラーダ』(中央議會)を選出した。議員は百五十人から成り、其中には、ウクライナの文化、教育、政治各團體並びに民族的少數者の代表者(一〇%)も参加し、議長としてグルシエフスキイ

副議長としてエフレモフ及びウインニチエンコが選ばれた。社會主義派(ウクライナ社會革命黨及び社會民主黨)は議會の多數を制した。社會聯邦黨はエフレモフを首領とし、民族的少數者の代表者と共に其反對の立場に立つた。議會は其組織が偶然性のものであつたに拘らず(偶然性のもの云へば『ソウェート、ラボーチフ、イ・ソルダートスキフ・デプタートフ』並に同時代の他の革命的團體の編成も皆然りであつて、ラーダが是等よりも多くの偶然性を帯びてゐたものは云へないが)ウクライナに於ける社會生活の活動中心であり、ウクライナ住民に根柢を有する所の最も確實にして權威ある機關であつた。而して該機關は社會との連絡範圍は日毎に擴大されて行つた。中央議會はウインニチエンコを大臣とする自治ウクライナ省を創立した。該省はウクライナに自治を施行するためロシア政府と鬭争を開始した。先づ中央議會は内閣總理大臣リウオフに、ウクライナに於ける最高行政部々員の人名簿を呈出した。リウオフは、人名簿はウクライナに於ける他の社會團體の希望に合致せねばならぬ云ふ拒絶的回答を與へた。爾來ウクライナの政治的組織の問題に就いて兩者の間に衝突が始まつた。

中央議會がロシア政府に次の要求を提出した、め、キエフミペトロダラドとの衝突は益々深刻になつた。

- 一、ロシア政府はウクライナ自治に對し好意的態度を示すこと。
- 二、ロシア政府はガリシヤ問題のため將來平和會議に参加するウクライナの權利を承認すること。
- 三、ロシア政府はウクライナ政務委員會を特設すること。
- 四、ウクライナに議會を有する特別行政委員會を設置すること。

- 五、戦線及び戦線背後に於けるウクライナ人を獨立部隊に編成すること。
- 六、先づ下級學校のウクライナ化を承認し、次に中等及び高等學校のウクライナ化を承認すること。
- 七、地方語を知り、且つ地方住民の信任ある者を以て行政官になすこと。
- 八、民族的欲求を満すべき費用の支出を議會の裁量に任すこと。
- 九、在外ウクライナ人に對し歸還を許可し、且つ捕虜たるウクライナ人に對する待遇を緩和すること。

以上の要求に對し臨時政府は左の主旨の回答を以て之れを拒絶した。即ち

- 一、議會がウクライナ住民の意志を正しく表示してゐることは信じない。
- 二、ロシアの分割に關係ある問題を今直ちに解決することは不可能である。
- 三、ロシア政府は憲法會議まで全ロシアに對する政權を保持する義務がある。

斯くの如き回答はウクライナ人の憤懣を呼び起し、エム・グルシエフスキイは『革命の祝日は終つた、威嚇の時が始まつた』と聲明した。六月十三日(舊曆)議會はキエフのソフィスカヤ廣場に於て宣言を公布し、以て政府との衝突の真相を發表し、ロシアとの關係を維持してウクライナの自治を行ふことを陳べ、ウクライナに於ける土地改革はウクライナ憲法會議によつて行はるべきを要求し、議會の利益のため、任意納税すべき事を住民に提案した。然るに、ウクライナ軍の兵力は次第に強大を加へ、ウクライナは民族軍革命に向つて近づきつゝあると言ひ得る状況になつた。

此事はロシア政府をして議會この協調點を發見する方法を講ずるの已むなきに至らしめ、ネクラソフ、ツエレテリ、テレシチエンコ、後にケレンスキイのキエフ訪問となり、種々交渉の結果協定成立して、遂に七月三日附臨時政府の宣言となつた。此宣言によつて『ゲネラリヌイ・セクレタリアート』がウクライナの最高行政機關であること、『ツェントラリナヤ・ラーダ』がウクライナ自治法案並びにウクライナ土地法案を憲法會議に呈出のため作成する權能を有すること、軍隊編成に關しては動員計畫の變更を來さざる限度を以て獨立ウクライナ軍隊の補充を爲し得ることが、定められた。

政府の聲明はウクライナ思想の勝利を示すものにしてウクライナ人に歡迎された。之れがため議會は第二回の告示に於て再びロシアの單一を言明し、單一問題に關するロシア政府の提案を承認し、議會之れに對して責任を有するセクレタリアートは最高地方機關であることを附記した。併しながら、ウクライナの絶對的自治思想は之れを排斥した。ペトログラドに於ては該協定の成立は異様の感想を與へ、立憲民主黨が政府の組織から脱退した原因の一つとなつた。ラーダ代表がセクレタリアートの業務規程並びに中央政府とウクライナ政府との關係を規定するためペトログラドに到着するや、彼等は極度の冷遇を受け、無爲にしてキエフへ歸つた。間もなくキエフにロシア政府の訓令が達した。訓令はウクライナ人の要求との間には大差があつた。特にゲネラリヌイ・セクレタリアートの權限及びウクライナ領域の劃定に關して差の甚しきものがあつた。政府は内務、財政、農業、教育、商工業、並びに勞働事務統轄のために九個のセクレタリを設け、セクレタリアートの管轄から國民食糧省、軍法會議、交通省、

逓信省の業務を除去した。ウクライナの領域に關しては政府はキエフスカヤ、ウオルィンスカヤ、ボドリスカヤ縣各一圓並びにテエルニゴフスカヤ縣の四郡のみに限り決定し、他の係争地方は衆民投票に依つて解決すべき事を約束した。

此訓令に對する責任上セクレタリアートは辭職し、ウイニチエンコは悲憤慷慨して國民戰の可能を語り、ウクライナ評論家はモスクワの官吏が小ロシア人を侮辱したペレヤスラフスカヤ・ラーダ時代を回想せしめる記事を発表した。斯くて、中央ラーダの會議に於ても反對演説はあつたが、結局政府の提案である九個のセクレタリ（元十四個の中から）承認を政府に交渉すること云ふ讓歩的決議を行ひ、事實上該訓令に服從した。

ロシア政府の没落並びに北方に於けるボリシエウイキの政權掌握と共に、キエフにはキエフのボリシエウイキによつて暴動が行はれた。併しこの暴動はウクライナ人によつて掃蕩せられ、且つ利用された。ゲネラリヌイ・セクレタリアートは缺員を補つて充實を計り、其政權が舊領域外に尙ほテエルニゴフスカヤ縣、ハリコフスカヤ縣、エカテリノスラフスカヤ縣、ヘルソンスカヤ縣各全部に及びことを聲明した。而して、ラーダは第三回宣言を發し、ロシアの關係を破壊せずにウクライナ民族共和國を建設すること、死刑を廢止すること、十二月二十七日ウクライナ憲法會議の選舉を施行すること、民族的少數者に各自の自由を許すことを發表した。狀況の發展に伴ひラーダが斯くの如き決議を與へたことは必然の勢であつたので、南西部及びルーマニヤ戰線司令部もラーダの行政權能を認め、然るに之等戰線の瓦解、ウクライナ特に其諸都市に於ける不良兵の充溢、地方統制のための社會的勢力の缺乏を利

用したムラウイエフを首領とするポリシエウイキがキエフを占領するに及んで、ラーダはジトミルに退去せねばならぬ羽目に陥つた。

第八節 獨逸駐屯軍、執政官政治、無政府

本書中既に屢々述べた如く、ロシアに於けるウクライナ運動にはセバチズムを含むことなく、戦前には自治主義さへも明瞭に表示されなかつた。然るにドイツ、オーストリアに於ては既に以前より對ウクライナ計畫が立てられ、ロシアからウクライナが分離する可能に就て考究されてゐた。特にロールバッツに於ては廣汎に且つ詳細に此問題が研究され、該問題は同地に於ける居住民一般の通常話題となり、分離は獨逸のために利益であり、又可能性を有するものであると論證されつゝあつた。戦時此思想は公の行動として現はれオーストリア並びにドイツに於けるウクライナ人捕虜は他のロシア人捕虜と區別され、特別な收容所に於て特別な待遇を受けてゐた。又ガリツィヤ生れのウクライナ運動者は之等ウクライナ人俘虜間に反露思想を宣傳して煽動する所があつた。

ブレスト平和條約締結と共に凡て之等の力を伸展せしめる時期が到來した。獨逸軍統帥部はラーダと協商を遂げウクライナにリンシンドン將軍指揮の獨逸聯合軍を派遣した。キエフに於てはポリシエウイキが一掃され、全ウクライナは歐洲の中央兩大國の軍隊に依つて占領された。斯くしてキエフに於ける實權は獨逸人の手に歸し、ラーダは唯だ形式的全權を有するに留まり、獨逸占領軍のための掩護たる用を勤めるに過ぎないものとなつた。然るにラーダの社會主義的傾向は獨逸人をしてラーダに對し不快の念を抱かしめた。五月に變動があつて地主黨の軍隊が首領スコロパツドスキイはラーダを改造したが、彼も亦た有名無實の權能を有するに過ぎず、彼の統轄する八軍團は唯だ紙面の數字に留まり、實際は僅かに司令部員を有するのみであつた。従つて獨逸が西部戦線に於て敗退し、ウクライナの撤退を開始するの已むなきに至るや、徴發した地主復活の暴政のために憤激した農民に對して全く無力であつた。茲に於て彼は支持者を索めるため、彼の周圍の上流階級代表者の壓迫の許に政策を變更することに及びロシヤの合同の原則を標榜することを試みた。然るにウクライナ民族同盟(ナシヨナル・ソユーズ)は解散されたラーダの議員をも糾合して今迄彼に對して取つた局外中立の態度を改め、倒閣運動の旗をベイヤ・ツエルコウイに擧げた。此運動は急速に全ウクライナに擴大し、間もなく内閣は轉覆し、ウインニチエンコ及びペトリューラを首領とするウクライナ執政官隷下の軍隊がキエフに進入するところになつた。

ウクライナ思想の最高潮に達したるは疑もなく此時である。此時はウクライナ社會運動者の精神の高潮と完全な協力一致を示した時代であつた。當時赤軍は尙ほ大なる力を有せず、モスクワは民主的ウクライナと平和的共存の準備あることを示し、レーニンはソウェート政權は前年の過誤を繰り返すことなく、ウクライナは開戦しないことを云ふ事を説きつゝあつた。茲に注意すべきはポーランド人のみならず、著しく不良な條件に置かれてゐたリトワ人、ラトウヤ人、エストニヤ人及びブルジャヤ人も亦た各自の能力に依り自己の獨立を保持し、鬭争に勝を制したのみならず、進んで自己の國に強固な民主的政權を組織したところである。然るにウクライナ運動は此種試練に堪へ

なかつた。ウクライナ執政々府は熱狂的に他民族を排斥し、ロシア新聞を閉鎖し、ウクライナ軍隊を以てスウヤトイ・ウラヂミル大學を占領し、之れに代はるべき純ウクライナ式『國立』大學の設立に着手した。民族的排斥行爲はロシア人に對して加へられたのみならず、キエフ占領後の初期に於てウクライナ司令部は明かにユダヤ人に對して破壊的脅威を加ふる所の宣言を發した。此事は新政府の立脚地を縮め、到る處に反政府熱を煽つた。多數の知識階級及び殆んゞ凡ての中流都市住民はウクライナ運動から手を斷つた。

ボリシエウイズムに對する恐怖並びに都市ミの鬭争は、執政々府をして農民及び村落に支持を求むるの已むなきに至らしめた。即ち、民族的マキシマリズムは已むを得ず社會的マキシマリズムミ化した。政權者の民主々義は多數が農民のみで代表された勞働會議の召集を以て組織的表現ミした『勞働主義』に改められた。而して、執政官の全計畫はウインニチエンコのプログラムに率由するものであり、其プログラムは『ボリシエウイキがウクライナに於て絶對に手足の出ぬ様に我々は活動しなければならぬ』と云ふのであつた。其結果ミして、ウクライナの住民は間もなく、ボリシエウイズムミ新形式のウクライナ運動ミの間に於ける差別感を失ふに至つた。一九一九年二月上旬ボリシエウイキがハリコフを占領し、キエフに迫るに及んで執政々府はウインニツアに、次でカメネツポドリスクに退却した。

併しながら、ボリシエウイキも亦たウクライナに於ては地位強固なるものでなく、ボリシエウイキの到来に反抗せざりし農民派も、ラコフスキイを首領ミするソウエト政權が共產主義的政策を實施し始むるや否や、之れに對して斷然たる鬭争を開始した。斯くて此際の鬭將マフノ、ゼリヨヌイ、ソコロフスキイ其他のアタマンの名はソウエト・コミッサールの名よりも有名になつた。

此鬭争によつて出鼻を挫かれたボリシエウイキはやがてデニキン軍に依つて一掃された。然るにウクライナ人に對し、農民派たるアタマンに對し、同時に鬭争するにはデニキン軍の力は餘りに微弱であつた。キエフは再びボリシエウイキに占領され、後にポーランド人が侵入し、更に又ボリシエウイキが来るミ云ふ状態であつた………概言すれば三年間の國內戦に於てキエフは手から手へ殆んゞ二十回も轉々した。

現時尙ほ、ウクライナ自體に於ては政權を樹立する可能性を有する分子がない。ペトリユーラは波蘭人側に立ちウインニチエンコはボリシエウイキに接近するためモスクワに赴き、ガリシヤには西部ウクライナ政府があつて兩者を否定しつゝ、行動し、ウラングリの陣營には獨立派に反對するロシア黨のウクライナ人が居るミ云ふ有様である。現時に於けるウクライナ運動の機關ミしては左記のものが存在してゐる。

一、前執政官の殘黨

ペトリユーラは其首領であり、同時にウクライナ軍總司令官である。執政官中他の二名（シユウエーツ、マカレンコ）は外國に去り、ペトリユーラの要求を拒絶して歸國せず、従つてペトリユーラは執政官の全職掌を兼務するミミ、なつた。此唯一人の執政官に屬する政府が存在し、ウクライナ黨の多數の代表者が之れに入閣して居る。總理はアレウイツキイである。

二、『ボロチビストウイ』派

ボリシエウイキ派にしてウインニチエンコが其首領である。黨派の中心地はウイナである。黨は二つの機關紙『ボリチバ』及び『ノーワ・ドバ』を持つてゐる。前執政内閣員シウエーツ教授及びマカレンコは此黨派に好意を有するが如きも積極的行動はして居らぬ。

三、『フリボロブ・デモクラト』黨

アタマン・スコロバドスキーが秘密に首領を勤めてゐる。此黨はウクライナの大地主を以て組織され、主要黨員はシエメート、スコロビシ、ヨルトウホフスキー、ドロシエンコ、エルツゲル、ツオグ、ウイリグリム・ガプスブルグスキー(ワシーリ・ウイシイワンヌイ)等である。

四、『ウクラインスキー・ナツィオナリスイ・コミテート』

最近モルコトウンの發起に依り巴里に於て組織されたもの、親露傾向を代表し、ウラングーリ將軍と協定を遂げたこともある。

五、ガリシヤ政府

執政官エウゲニー・ペトルシエウイチ博士を首領とする。執政官下の政府と政治的意見の相違を來して創立されたものである。最初執政官と連絡を有し、自治政府として活動してゐたが、後にペトリユーラがポーランドと條約を締結したため執政官と絶縁した。此政府はガリシヤ農民を基礎とし、チエツク・スロヴァキヤとの聯邦

主義を根本としてゐる。政府にはガリシヤの最高知識階級が加入してゐる(一九二〇年末の状況)

第九節 結論と將來

最近三年間に於けるウクライナの歴史を結論する爲には先づ次の事情を記さねばならぬ。即ち、

一、ウクライナは他のロシヤに類似しない獨特の地方である。大ロシヤに於ては、ボリシエウイズムの永續を許すも、ウクライナ農民は自己の意向と相容れない政權を成立せしめざるために充分なエネルギー組織要素を具へて居る。併しながら、農民自身は自己の政府を創設するだけの實力を有しない。これはウクライナ生活の表面上に政權移動の頻々たる所以である。

二、政黨のうち、ウクライナ住民も最も確實に連絡を有するものは民族的ウクライナ團體である。普通選挙の結果は之れを雄辯に物語つてゐる。デモクラシーを基礎とする地方の統治はウクライナ人の協調以外には斷じて成立の餘地がない。他の方法に依つて行はるべき凡ての政權は正當な統治を確立し得る望みがないので、軍事占領を計畫せねばならぬ。

三、併しながら、前記事情と同時に、ウクライナ運動が獨立のウクライナ國家組織を創造し、内外の多事を解決するために不十分な組織であること云ふことは、經驗の示す所である。ウクライナ運動は孰れにしても初めの間は外部からの支持を必要とするであらう。最近に於けるウクライナ運動の特色たる對外向背の多様な變轉は之

れが爲である。

此結論を以て將來を豫想するに、先づ第一に起る質問は、各種對外政策の中、如何なるウクライナ運動が最も成功の機會を有するか云ふ事である。チエツク・スロヴァキヤ並びに獨立波蘭形成後の現今に於ては、以前の對境計畫は記録文庫に仕舞込まるべきものである。同時に、ウクライナは海外、例へば、英、佛から管理せられ、指導せられるためには餘りに大であり、特殊である。ポーランド人との永續的協同は、一方ウクライナ運動が農民を基礎させざるを得ないのに、他方右岸ウクライナに於けるポーランド人が殆んゞ凡て地主である點を見ても、不可能なことが明かである。

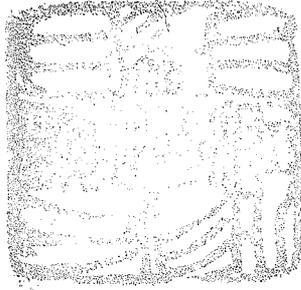
斯くてウクライナの爲には唯だロシヤとの協同の可能性のみが残る。ロシヤ語はウクライナ人ミロシヤ人との交渉上除外し得ないであらう。従つてロシヤの勢力はウクライナに於て強大であらう。ロシヤの文化は、孰れにしても初期に於ては、ウクライナ文化の基礎であらねばならぬ。ロシヤ文化無くしては最高教育機關を設置することは不可能である。如何にウクライナに於けるロシヤ人が最近の事件發生時に統一を缺いたこと云つても、彼等を度外視することは出来ない。一方、ロシヤ分子がウクライナ人なしに地方を統治し得ないことすれば、他方、ウクライナ人にも、ロシヤ分子を敵とする時、常に自己の事業に於て多くの障礙に遭遇するであらう。

ウクライナ思潮ミロシヤ國家との堅牢な協同のみが、ウクライナに於て自然にして且つ唯一の組織的原則である。

勿論、現在の心理状態では協同に就いて語ることは困難である。特にロシヤに無政府状態が存在することに由つて協同は益々困難である。ロシヤに於て保守的運動が發展する場合も、此協同は、波蘭人ミウクライナ人との共同動作の可能が信ぜられ難いと同様に、極めて困難であらう。併し、ロシヤ・デモクラシーとの協同——これは充分可能性のあるものである。

其協同の形式に就て語ることは尙ほ早計であらう。併し、デニキンの『廣大な自治権』の如き全く何もかも語らない空な標語は永久に廢されねばならぬ。思ふに、共通經濟政策、共通國際代表を承認しての兩國聯邦關係を結ぶことが最も實現し易い形式であらう。而して、地方的内部の立法、財政、軍事は完全に獨立して可なりであらう。

此の如き解決は、平等ミ自由ミを基礎として二つの同族民族を合一せしめ、ウクライナに於ける内部的關係を鞏固ならしめ、ウクライナ運動の發展のための形式を與へるものであつて、ウクライナ問題を確實に解決すべき唯一の手段である。其他の解決方法はウクライナ問題を根本的に解決し得るものでなく、却て其解決を遷延せしめるのみで、一時的短命的性質のものである。



39.1.16
135525

Seiji 2

例 言

- 1、本書は一九二一年伯林で出版せられたウ・スタンケウイチ著『露西亞諸民族の運命』を全譯せるものである。
(В. Станкевичъ. СУДЬБЫ НАРОДОВЪ РОССИИ. Бѣлоруссія. Украина. Литва. Латвія. Естонія. Армения. Грузія. Азербейджанъ. Финляндія. Польша. — Изданіе И. П. Ладъж-никова. Берлинъ)
- 1、本書は一面に於て單一露西亞の瓦解分裂の過程の研究であり、他面に於て大ロシア民族の專政下に置かれた露西亞諸民族の自治及び獨立に向つての民族開放運動の研究である。
- 1、著者は本書に於て帝政々府の他民族露化政策の功罪を論じ、露西亞に於ける所謂ウクライナ運動、白露運動、波蘭運動等の真相に就て語り、革命後何故に波蘭及びバルチック海沿岸の芬蘭、エストニヤ、ラトウイヤ、リトワ等が露西亞より分離して獨立國家を形成したか、何故にボリシエウイキが民族自決の基礎の上にソウヴェト聯邦を組織したか、何故に社會主義國家に於て小數民族の權利がプロレタリアの權利と並行して伸張して行つたかといふ我々の疑問に對し直接或は間接に答辯を與へてゐる。
- 1、露西亞に關して何人も其處には分裂の過程は既に終り、新らしき統一運動がボリシエウイキの手に依り完成せられたといふ事は出來ぬであらう。波蘭及びバルチック沿岸諸國の分離により單一不可分の露西亞は既に破綻を

生じてゐる。ソウェート聯邦に於ては諸民族自治の基礎の上に聯邦國家の形式備はり民族自治が統一結合の原
因となつた事は疑ひ無いが、併し同時にそれは結合の否定的原因たり得るものであつて、世界最初の社會主義
共和國聯邦も亦單一露西亞國家の分裂の一段階に過ぎないといふ一部の人の觀察が或は事實の真相に近いかも
知れぬ。何となれば民族自決の勢の赴く處、聯邦内に於て異常なるセバラティズムの進行を促し遂に多くの聯
邦内共和國をして露西亞の文化及國語を否定し、露西亞語を第二外國語と認定するに至らしめ各民族間の滯渠
は總有る方面に於て深まりつゝあり、一方唯一の統合的要素なるコンミュニズムは其初期の感激的分子を失ひ、
一の退屈なる形式的官僚思想に墮せんとする傾向を示し諸民族を結合する力弱く、聯邦共產黨の中心的勢力に
して動搖を來さんか聯邦が四分五裂する虞れ無しは何人も斷言し得ないであらうからである。

一、本書の著者は露西亞の分裂は世界陸地の六分の一を有する地域に於ける諸民族の心理的單一、法制的單一、經
濟的單一の潰滅と關聯し文明の進歩に非ず退歩なりと斷じてゐる。又歐亞に跨る大平原を幾多の斷片とし、各
斷片を一國とす事は決して露西亞に樂觀的將來を約束せず、單一機構より分裂する事は諸民族に取り經濟的
に不幸であるを爲し幾多の實例を以て之を示してゐる。著者はまた分裂せる各國に於ける他民族の数が二千萬
人に上る事を理由として分裂の人種誌的困難をも指摘し、結論に於て統一露西亞の文化的價值其他を高唱し單
一不可分の露西亞の必要を叫んでゐる。

一、六十有余の異民族を包含する露西亞の將來は統一か分裂か。こは獨り一露西亞のみの問題で無く實に世界の
問題である。本書は此の問題を研究せんとする者に取り稀に見る良書である事を信ずる。

一、本書譯者 島野三郎氏、市川寅次郎氏、岩淵駿一氏。

昭和五年一月

庶務部調査課

本書の著者ウ・エ・ベ・スタンケーウイチの略歴

スタンケーウイチの略歴に關する微細なる記述は必ずしも本編を評價する上の資料とはならない。故に茲には多く之を省略し、その主なる點を記するに止める。

ウ・エ・ベ・スタンケーウイチは一九一三年の秋彼得堡大學を卒業し、成績優秀なりし彼は同大學助教授たらんがため露西亞並に諸外國の刑法研究を目的として法科に留まつた。

歐洲戰爭の開始さるゝや、彼は進んで士官學校に入學し、卒業後先づ歩兵隊に入り次いで技術部隊に加はつた。然ゆるが如き愛國心と才能と精力とは曾て辯護士の助手たりし彼を驅つて野戦築城家、築城法教官、築城法講義書の著者たらしめ、斯くて彼は漸くその名を世に知らるゝに至つた。

一九一七年露國革命の勃發と共に、スタンケーウイチは主戦派の將校としてペトログラードに於ける社會革命黨及社會民主黨の執行委員會の一員となり、臨時政府の擁護、治安維持並に戰爭の繼續の爲にあらゆる努力をなし、その後北部戦線の政治委員となり、次いでクレンスキイ自からの要望により、大本營最高委員となつた。

スタンケーウイチは軍隊が戰爭を忌避し不穩の行動ありし見たる場合常に身を挺してその秩序の恢復に當り、生命の危険を冒して戦線の危機を救へる事屢々である。

スタンケーウイチは亦文學に長じ、俊敏なる法學者にして且つ辯舌に巧みなる、稀に見る才幹であつた。

ボリシェヴィキ革命の興るや、彼は臨時政府を擁護すべく萬般の手段を講じたが、遂に利なく、臨時政府の崩壊後革命露國を後にして亡命の旅に上つた。

スタンケーウイチは彼が本篇にその運命を描寫せる諸民族の郷土に五ヶ年の歲月を送つた。彼の博識、才智並に鋭い觀察眼は本篇をして極めて貴重にして且つ凡人の克くする能はざる完全なるものならしめた。

本篇の外、著者は幾多の著作を有する。『一九一四年—一九一九年の回想記』並に『露西亞の獨逸』は特に注目すべきものである。殊に前者は極めて興味あり且つ貴重なるものにして、それはスピリドウイチが、その著『ボリシェヴィズムの發達史』(本課出版)に於て屢々スタンケーウイチに言及せるの事實を以ても知らるゝのである。(一九二〇年伯林出版同氏著『一九一四年—一九一九年の回想記』に據る——調査課)

度量衡比較表

區分	露	國	米	突	法	日	本	支	那	英	(米)	國
尺	一 (五〇〇) サイジエン (ウエルスト)	一 (七) フット又は (三) アルシン	一 (二) サイジエン									
度	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン
重	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン	一 (一) サイジエン

度量衡比較表

勞農露國研究叢書

既刊

- 第一編 統治組織及機關、各聯盟共和國概要
- 第二編 外國人の法律的地位、私營事業及私有財産權、工業組織、トラスト模範定款、露國工業法概要、勞働需給關係
- 第三編 革命後の農村經濟狀態、農村經濟統計、國營事業、露領極東及西比利の經濟事情、自治共和國及自治州
- 第四編 通商事情、外國貿易の制度及組織
- 第五編 工業經濟に關する指導的意見、共產黨第十二回大會決議、工場委員會、國民教育
- 第六編 社會保險、勞農國家ミ教會、言論機關、地方統治組織、軍事

既近刊總目錄

昭和五年三月五日印刷 昭和五年三月十日發行		南滿洲鐵道株式會社編纂	
代表者	佐田弘治 郎	代表者	佐田弘治 郎
印刷兼 發行人	荒木利一 郎	印刷兼 發行人	荒木利一 郎
印刷所	東亞印刷株式會社大連支店 大連市近江街九一	印刷所	東亞印刷株式會社大連支店 大連市近江街九一
發行所	大阪每日新聞社 大阪府北區堂島(電話大阪四五〇番)	發行所	大阪每日新聞社 大阪府北區堂島(電話大阪四五〇番)
同	東京毎日新聞社 東京市西之區(電話東京二九〇〇番)	同	東京毎日新聞社 東京市西之區(電話東京二九〇〇番)
販賣所	中野文化協會 大連市中山街九一	販賣所	中野文化協會 大連市中山街九一
同	東亞經濟調查局 東京市神田區區北三丁目	同	東亞經濟調查局 東京市神田區區北三丁目
同	丸善株式會社 東京市日本橋區區二丁目(電話東京五五五番)	同	丸善株式會社 東京市日本橋區區二丁目(電話東京五五五番)
同	株式會社 鐵道圖書部 東京市神田區中興橋二丁目(電話東京六五五五番)	同	株式會社 鐵道圖書部 東京市神田區中興橋二丁目(電話東京六五五五番)
同	大阪屋敷圖書部 大連市浪速町二丁目三三八(電話大連五五五番)	同	大阪屋敷圖書部 大連市浪速町二丁目三三八(電話大連五五五番)
不許復製		定價參圓八拾錢	
露西亞諸民族の研究			